

# J. S. バッハのいわゆる『ピカンダー年巻』について

On J. S. Bach's so-called "Picander-Jahrgang"

江端 伸昭

Nobuaki Ebata

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(Johann Sebastian Bach)のライプツィヒ時代(1723-1750)の協力者で詩人・韻文作家のクリスティアン・フリードリヒ・ヘンリーツィ(Christian Friedrich Henrici, 1700-1764)、筆名ピカンダー(Picander)は、教会暦の主日・祝日のための1年分の教会カンタータ歌詞台本集を1728年に出版した(Picander 1728)。この歌詞台本集を、バッハがライプツィヒ市音楽監督の職務として行なった教会カンタータの継続的な作曲上演活動の中に、どう位置付けるべきか。この未解決問題を本論考では一括して「ピカンダー年巻問題」と言い表す。この問題の探究の歴史は、取り組みの困難さゆえに、それぞれの時点におけるバッハ研究の進展の度合いと全般的な問題意識をよく反映している。

ピカンダーの歌詞集の全体像を日本語で紹介したものはこれまで存在せず、ピカンダー年巻問題の基本文献である(Häfner 1975)にも、歌詞タイトルのすべてが表として載っているわけではない。本稿では、その70のカンタータ歌詞すべてについて、タイトルとその邦訳<sup>1</sup>、および楽章構成を示す一覧表を与え、また「ピカンダー年巻問題」を考えるための準備的な説明を述べて、この複雑な問題への入り口としたい。

## 1. ヘフナーによる「バッハのピカンダー年巻」仮説について

ライプツィヒの詩人・韻文作者でバッハの協力者であったC.F. ヘンリーツィ、筆名ピカンダーは、1728年に『通年の主日と祝日のためのカンタータ歌詞集』(Picander 1728)を出版した。この「教会暦1年分の歌詞集」の中の歌詞に作曲されたバッハの教会カンタータは、9曲現存する<sup>2</sup>。19世紀後半のバッハ学者シュピッタ(Philipp Spitta)はこの歌詞集を点

<sup>1</sup> このタイトル邦訳は藤原一弘氏(音楽学)の手になるものであり、藤原氏に心から感謝を申し上げます。

<sup>2</sup> BWV 197a, 171, 156, 159, 145, 174, 149, 188の8曲(うち197aと188は一部分が消失)、および断片のみでほとんど失われているBWV Anh. 190(Dürr 1958)。この他に、深く関連するものとしてBWV 84があるが、これを含めて数えるのは適切でない。

検し、1728 年 6 月 24 日付の序文中にある「楽長バッハ氏の作曲でライプツィヒの主要教会で上演されることが期待される」という趣旨の一節を引用している<sup>3</sup>。しかし、教会カンタータの成立年代とカンタータ年巻についての正しい認識を持っていなかったシュピッタは、この歌詞集によってバッハが 1 年分の教会カンタータを作曲した可能性を考えてみることはできなかった。

以下では必要に応じて、このピカンダーのカンタータ歌詞集を PJ (der Picander-Jahrgang)、1728 年に出版されたその初版本を PJ-1728 として引用する。ピカンダーは、自作の詩を数年ごとに大きな詩集にまとめて刊行する習慣であった。PJ はその第 3 巻の中に再録されており (Picander 1732: 79-188)、この版を PJ-1732 として引用する。シュピッタの当時から知られていた初版本 PJ-1728 の現物はドレスデンにあった 1 部だけであったが、詳しい調査が行われないまま第 2 次世界大戦で失われてしまった。したがって、1950 年代に始まったバッハ研究の大変革と急速な進歩の時期に、このピカンダーの歌詞集 PJ は再版 PJ-1732 によって調べるしかなかったのである。

アルフレート・デュル (Alfred Dürr) は、ライプツィヒ時代の声楽曲の成立年代に関する大論文 (Dürr 1957; 改訂版単行本 1976) の中で、バッハが PJ (PJ-1728) によって「4 番目の」カンタータ年巻を作曲した可能性について触れている (Dürr 1957/1976: 18-19)。しかし、教会カンタータ自体は 9 曲しか現存しないので、それらを含むカンタータ年巻がかつて本当に存在していたのか否かについては、すでにシャイデ (William Scheide) との間で論争があった (Scheide 1961a; Dürr 1961; Scheide 1961b)。シャイデは、現存しない第 4 と第 5 のカンタータ年巻なるものはそもそも初めから存在しなかったのではないか、という根本的な問題を投げかけたのであり、これは現在に至るまで完全には解決していない。しかし、当時のシャイデの論法には難点があり、ピカンダーの歌詞集 PJ によってバッハが教会カンタータをさらに書いた可能性がこの論争によって否定されることはなかった。

PJ によるバッハのカンタータ年巻がかつて存在した、と積極的に主張したのはクラウス・ヘフナー (Klaus Häfner) である<sup>4</sup>。ヘフナーの論文「ピカンダー年巻 (Der Picander-Jahrgang)」(Häfner 1975) は、バッハが PJ-1728 を使って、1728 年の「洗礼者ヨハネの祝日」(6 月 24

---

<sup>3</sup> シュピッタが引用した部分は (東川 1981: 84) に訳出されている。序文の全体を引用しなかったことは、引用されなかった部分にも現在の立場から見て有益な情報が含まれていた可能性があるもので、残念なことである。

<sup>4</sup> ヘフナーは、PJ の初版本 (PJ-1728) と詩集第 3 巻中の再版 (PJ-1732) に対して、それぞれ PJ I、PJ II という略語を用いている。

日)からの1年間で完全なカンタータ年巻を作ったが、現存する9曲を除きすべて失われた、という仮説を正面から打ち出して、それを証明する根拠(となり得るもの)をいろいろ挙げている。これは、デュルの提案を受けて詳しく展開したものと言える。

実は、「ピカンダー年巻」という用語が何を意味するかはしばしば曖昧である。特に、日本語の場合はかなり曖昧な言葉遣いが用いられており、注意を要する。「ピカンダー年巻 (der Picander-Jahrgang)」とは、ピカンダーのこの「教会暦1年分のカンタータ歌詞集」自体を意味するのである。ヘフナーの論文のタイトルや論文中の用語法もその通りであるし、本稿で最初からこの歌詞集にPJという略語を用いているのもそのためである。ただ、ヘフナーの主張が「PJによってバッハがカンタータ年巻を実際に作っていた」という趣旨であるから、その仮説的カンタータ年巻を(例えば)「バッハのピカンダー年巻」のように言い表すことはある(Häfner 1975; Hofmann 2002)。これを単に「ピカンダー年巻」と省略することがしばしば見られるが、これは歌詞集PJと混同するので避けるべきである。

上述のように、PJ-1728は1728年の「洗礼者ヨハネの祝日」から始まる1年分のカンタータ歌詞を収め、その序文では「楽長バッハ氏」の作曲による「ライブツィヒの中央教会の礼拝で」の上演への期待が述べられている。ヘフナーが強調しているように、これは当時の社会的慣習から見て、歌詞集がピカンダーの単なる個人的創作物ではあり得ず、事前にバッハ自身やライブツィヒ市および教会の当局者と密接なコンタクト(ないし許可)を取った上で出版された、ということを明白に示している。しかしこれは、ヘフナーが主張するように、バッハが「まさにその1年間で」PJのすべての歌詞を次々と作曲しカンタータ年巻を作った、ということを必ずしも意味しない。PJという出版物そのものは、ピカンダーの名前で出版された個人的な歌詞集であり、市や教会の公的出版物ではないからである。そこに問題の難しさがあり、ヘフナーの議論はこの点が明確でない。

デュルやヘフナーが考察した当時は、「ピカンダー年巻問題」の研究はきわめて困難であった。PJ-1728は、その内容の詳しい記述がなされないまま戦争で消失してしまい、詩集第3巻中に再録されたPJ-1732で調べざるを得ないが、それはPJ-1728の序文を含んでいない。また、PJ-1728は教会暦1年分のカンタータ歌詞集を「洗礼者ヨハネの祝日」(6月24日)から開始するが、これはかなり異例であって、P-1732では待降節第1主日からの普通の教会暦順に直されており、特定の年の教会暦にとらわれず70の歌詞を含む。そのため、PJ-1732がPJ-1728の原型を内容的にどこまでとどめているかを見極めることが難しい。

ヘフナーは最初、PJ-1732は後の補充と整理の結果であり、PJ-1728はそれとは異なって、

1728 年 6 月 24 日からの 1 年間にライブツィヒで教会カンタータが実際に上演される主日・祝日の歌詞 60 だけを含んでいた、と想定し (Häfner 1975: 76-77)、PJ-1728 が教会で配布・販売された歌詞冊子であるとさえ主張した。そこで、またもやシャイデが反論に立ってこれを批判し、PJ-1728 の内容の推定について充実した応酬が行われた (Scheide 1980; Häfner 1982; Scheide 1983)。シャイデは詳しい計算を行なって、PJ-1728 に含まれる歌詞の数は PJ-1732 と同じ 70 であり配列順が違うだけである、と結論づけ、ヘフナーもその推論を認めた。またその計算から、ヘフナーは PJ-1728 が 4 分冊で 3 ヶ月おきに出版されたものと推測した<sup>5</sup>。

驚くべきことに、21 世紀になって (2008 年 9 月)、タチヤナ・シャバリナ Татьяна Шабалина (Tat'jana Shabalina) は、サンクト・ペテルブルクのロシア国立図書館で PJ-1728 の未知の 1 冊を発見した (Schabalina 2009b) <sup>6</sup>。この予期しない発見によって PJ-1728 の現物が初めて点検できるようになり、その結果、シャイデの批判 (Scheide 1980) とそれを受けたヘフナーの修正案 (Häfner 1982) がほとんどすべて正しいことが実証された。これもまた驚くべきことである。ただし残念なことに、この再発見本は最初の 12 ページ分が欠落しており、その結果、序文は含まれていない。

現在では、「バッハが PJ によって 1 年間でカンタータ年巻を作曲した」というヘフナーの主張は「そのままの形では」成り立たない、ということが一般に認められている。しかし、1 年よりも長い期間をかけてバッハが PJ のかなりの部分を作曲した可能性は否定できない。これについて少し述べておく。

デュルが 1950 年代にすでに、「バッハが PJ によってカンタータ年巻を作ったのではないか」という「ピカンダー年巻仮説」(というべきもの)を立ててみた理由は明らかである。現存する教会カンタータのオリジナル手稿譜についての大規模な古文書学的調査によって、バッハの主日・祝日のための約 150 曲の教会カンタータのほとんどが 1727 年前半までに成立し、それらが 3 つのカンタータ年巻を構成していることが知られる。それ以降に作曲され、3 つのカンタータ年巻への追加作曲ではないものは約 20 曲以下しか現存しないので、バッハがカンタータ年巻を 5 つ作ったことを認める場合は、かなりの数の教会カンタータ

---

<sup>5</sup> ヘフナーは、4 つの分冊がそれぞれ「洗礼者ヨハネの祝日」「大天使ミカエルの祝日」「新年」「復活祭第 1 祝日」に始まるものと推定し、これもシャバリナの発見で完全に確かめられた。

<sup>6</sup> この新発見の歌詞本と関連事項について、筆者は 2010 年以來 Tatiana Shabalina 氏から寄せられたさまざまな情報と意見交換に対し、深い感謝の意を表する。

が早くから消失したことになる。ところが、約 20 曲のうち 9 曲はその歌詞が PJ に見出される上に、それらの成立時期も PJ-1728 の出版とほぼ同じ 1728-29 年頃と推定できる<sup>7</sup>。したがって、この時期にバッハが PJ からさらに何曲も作曲していても不思議ではなく、それが大量に失われてしまった可能性がある。つまり、「ピカンダー年巻仮説」を立てる余地が十分ある、ということである。

デュルの提案を素直に発展させれば、大体のところ、以上のような柔軟な主張に整理することができる。バッハが PJ をすべて作曲したとは言っていないし、まして、すべてを 1 年間で作曲したとは言っていない。ところが、ヘフナーはデュルの提案をもっと強めて、「バッハが PJ-1728 を用いて、1728 年の洗礼者ヨハネの祝日に始まる特定の 1 年間で、1 つのカンタータ年巻を作り上げた」という明確に固定された形で主張したため、さまざまな不確実な痕跡が示す曖昧な現象にうまく対応できず、かえって主張の信用性を落としてしまった。これは残念なことである。

しかし一方では、ヘフナーはこれとは別に、1975 年の論文ですでに、バッハの「4 声コラール集」の中に、PJ の歌詞に作曲されたが後に失われた教会カンタータの楽章（終結コラール）であった 4 声コラールが多数含まれている、という可能性について具体的に詳しく調べていた（Häfner 1975: 103ff.）。その調査結果を検討してみると、確かに、バッハが PJ によって、現存する 9 曲以外にさらに 20～30 曲程度の教会カンタータを作曲した可能性が考えられる、ということが分かる。これは、「バッハのピカンダー年巻」の存在を決して立証していないが、バッハの失われた教会カンタータ全般についての詳しい探究を今後も進めるべきことを示している。また、4 声コラール集に関する調査は、現在の立場からさらに詳しく推し進めることができる。

## 2. ライプツィヒ時代の教会声楽曲年代研究の土台部分

バッハのライプツィヒ時代の教会カンタータに関して、筆者は紀要 17 号でその研究史に触れている（江端 2017、特にその第 3 節）。ここでは、それを少し異なる観点から補足しつつ、ピカンダー年巻問題の背景を述べて、何が問題なのかを考える手がかりとしたい。

---

<sup>7</sup> 資料学的に確証できる 1728 年頃の上演はきわめて少ないが、PJ の歌詞によるバッハの現存する教会カンタータは、少なくともそのオリジナル手稿譜が現存する場合は、この 1728 年頃に成立したことがほぼ確実である。また、いくつかの断片的痕跡は、これらの教会カンタータがむしろ半年遅れて、1728 年 11 月の待降節からの 1 年間に成立したこと、すなわち、その作曲時期が PJ-1728 の出版と直結していなかったことを示唆している。

ライプツィヒ市音楽監督バッハの主要な職務は、市の2つの主要教会（聖ニコライ教会と聖トーマス教会）における教会暦の主日・祝日の通常の礼拝において、毎回規則的に（すなわち「レギュラーに」）、礼拝の「主要音楽」として教会カンタータを上演することであった<sup>8</sup>。「レギュラーな」教会カンタータは教会暦の指定用途日が定められ、その主日・祝日の指定聖句（ペリコーペ）と関連する歌詞を持ち、1年に1回しか上演できないので、毎回の礼拝で規則的に上演を続けるためには多数の教会カンタータをレパートリーとして必要とする。バッハの現存する約190曲<sup>9</sup>の教会カンタータのうち、教会暦の主日・祝日用の「レギュラーな」ものは約170曲で、そのうち約150曲がライプツィヒ時代の作品である。消失してしまった曲数は確実に分らないが、その目安をつけることはできる。まず、ライプツィヒでは教会カンタータの上演を伴う主日・祝日は年間約55日<sup>10</sup>であり、その個々の主日・祝日に対してバッハの現存する教会カンタータの曲数が3曲であることが多い。つまり、教会暦で3年分ほどの「レギュラーな」教会カンタータが残されているわけである。また当時は、規則的に続く毎回の礼拝に対応する必要上、「レギュラーな」教会カンタータは教会暦1年分まとめたセットとして把握（整理・管理・運用）され、それを「カンタータ年巻（Kantaten-Jahrgang）」と呼ぶ<sup>11</sup>。「死者略伝」（1754）によるとバッハはカンタータ年巻を5つ遺したとされ、これは次男エマヌエル・バッハ（Carl Philipp Emanuel Bach）が執筆者に提供した作品リストの先頭にある記述なので、その真偽は別に検証するにせよ、考察の出発点の1つとして重視されなければならない。つまり、バッハの作曲した「レギュラーな」教会カンタータは最大でも約275曲程度である、ということは確実にすべきである。したがって、消失したものは最大でも約100曲程度であり、現存作品約170曲はカ

---

<sup>8</sup> この他に、個別機会の「スペシャルな」礼拝（婚礼や葬儀、また市参事会員交代式典など）における「主要音楽」の上演もバッハの職務であるが、そのための教会カンタータは別のレパートリー群を形成し、目下の問題には直接関与しない。現存するバッハの作品も約20曲と少ない。

<sup>9</sup> 曲数に言及する場合に「約〇〇曲」という言い方が多いのは、大きな改作や用途変更などの理由によって、数え方（何を1曲とするか）が難しい作品があるためである。

<sup>10</sup> 年間の主日・祝日数は約65だが、待降節と受難節には教会カンタータが用いられない「禁止期間（tempus clausum）」が設けられる。ライプツィヒの場合は9つの主日がこれに該当する。

<sup>11</sup> バッハ当時は「教会カンタータ」という言い方がなく「教会曲（Kirchenstück）」と言うので、カンタータ年巻は「教会曲の年巻（Jahrgang von Kirchenstücken）」と言われる。文脈で理解される場合は単にJahrgangと言うことが多く、それを「年巻」と訳す慣習があるが、本稿ではできる限り「カンタータ年巻」と言い表す。日常語としてのJahrgangはおおむね「1年という時の流れが過ぎていくことで生じるもの」といった意味であって、語が単独で用いられている場合は「年巻」よりも「年度」と訳すべき場合がある。



ンタータ年巻 3 つ分にだいたい相当するだろう、という目安がつけられる。ここまでは、単純すぎる議論ではあるものの、考察の出発点として役に立つはずである。

毎回の主日・祝日に 2 つの主要教会の礼拝で主要音楽として教会カンタータが「レギュラーに」（規則的に）上演されることは、文字通り「規則」であり、その実行はライブツィヒ市音楽監督の職務であった。したがって当然、ケーテン宮廷楽長から転じて就任したバッハもそれを実行し、しかも就任時点での教会カンタータ自作レパートリーはヴァイマル時代の比較的少数の作品しかないのだから、就任当初に大量の教会カンタータを次々と新作したはずで、もしそうでなかったら職務が遂行できないだろう。現代のわれわれにはこの想定はきわめて自然に感じられるし、実際、それは 1950 年代に急速に発達した科学的な年代研究によって確実に証明されたのである。しかし、19 世紀後半にバッハについての包括的な著書を著したシュピッタはそうは考えず、バッハはライブツィヒ時代 27 年間を通じてだいたい平均的に、主日・祝日のための教会カンタータを毎年数曲ずつ作ったかのように考えていた。このような考え方にあったからこそ、シュピッタは、ピカンダーのカンタータ歌詞集 PJ-1728 の序文を引用しているにも関わらず、バッハが PJ-1728 によってカンタータ年巻を作りあげた可能性については考えられなかった、と思われる。教会カンタータの作曲ペースに関するシュピッタ式の見解は 20 世紀半ばまで基本的に疑われず踏襲され、結果として、毎回の主日・祝日における規則的な教会カンタータ上演という職務の実際の・職人的性格が、理解されないままに放置され続けたのである。

シュピッタのようにバロック音楽に精通した専門家でも陥ったこの誤りは、2 つの側面から考え直して克服する必要がある。1 つは資料研究を通じた年代研究である。ほとんどの場合、個々の教会カンタータの作曲成立年代は直接には分からないので、オリジナル手稿譜（自筆総譜と演奏用パート譜セット）の徹底的な「古文書学的調査」を通して科学的・実証的に明らかにされなければならない。これは、バッハ自身の筆跡の年代変化、オリジナル手稿譜の紙の透し模様、オリジナルパート譜セットを作成した多数の書き手の分類、という 3 方向からの科学的・実証的な調査と推論によって行われ、1950 年代以降に飛躍的に発展した。

もう 1 つはカンタータ年巻である。教会暦の主日・祝日のための教会カンタータに関しては、その「レギュラーな」性質のゆえに、作曲年代の研究だけでは不十分なのであって、バッハ自身がそれらをどのようにグループ分けし、カンタータ年巻として整理・管理・運用していたのかを調べる必要がある。これもまた、具体的な記録が何一つないため直接に

は知ることができない<sup>12</sup>。また、その解明は本来、年代研究とは独立した問題であって、別の手段と方法でかなり調べることができる。まず最初に分かることは、現存する多数の教会カンタータのオリジナル手稿譜がいくつかの「まとまり」となって伝承され、それらがバッハの遺産相続での分配の結果をかなり反映すると考えられることである。しかも、それらのまとまりは教会暦と対応しており、カンタータ年巻への分類を受け継いでいると判断できるので、遺産相続が基本的にはカンタータ年巻単位で行われたことも想定できる。これは当然、「レギュラーな」教会カンタータとして自然なことである<sup>13</sup>。

こうして、これらの教会カンタータを一方では成立年代順に配列し、他方では伝承グループから推定されるカンタータ年巻への分類表を作って、両者を比較してみれば、そこに密接なつながりがあることが一目瞭然となる。バッハは主日・祝日のための教会カンタータを、「基本的には」、カンタータ年巻ごとに次々と作曲したのであって、既存の作品をずっと後になって5つに編集したわけではなかった。しかも、現存する作品の大半はライプツィヒ時代の最初期に立て続けに書かれ、少なくとも3つのカンタータ年巻が次々と成立したのだから、バッハが少なくともこの時期には、テーレマン (Georg Philipp Telemann) やシュテルツェル (Gottfried Heinrich Stölzel) のような当時の作曲家と基本的には同じ態度で「レギュラーな」教会カンタータを作曲していたことが分かる<sup>14</sup>。デュルはあらかじめこの点に注意を促している (Dürr 1957/1976: 12)。

今述べたことは、成立年代の解明とカンタータ年巻の復元作業を別々に独立して行なう「純粋な」議論の進め方であって、現代の立場から見ると、そのような一貫した論理性を保って年代研究の理論を展開するほうがずっと好ましい。しかし、アルフレート・デュルは、ライプツィヒ時代の声楽曲の新しい年代研究を提示する大論文 (Dürr 1957; 改訂版単

---

<sup>12</sup> シュピッタは、現存する主日・祝日用教会カンタータがどのようにカンタータ年巻を構成しているのか、具体的な解明を試みてはいない。

<sup>13</sup> 基本的な「まとまり」の1つはトーマス学校の所有である多数のコラール・カンタータのオリジナルパート譜セットで、アンナ・マクダレーナ未亡人の相続分から来たことが知られている。それ以外の現存する教会カンタータの大部分は C. P. E. バッハの遺産目録に記されているが、デュルがその中に2つの系列を発見したことが突破口の1つとなった。ただし、バッハの息子たちの間で後に所有楽譜の移転があったことは知られており、C. P. E. バッハの遺産目録の記述がバッハ本人からの直接の相続分を示すとは限らない (Kobayashi 1992; Wollny 2001)。

<sup>14</sup> シュピッタは、相当数のオリジナル手稿譜を調査し、不完全で誤りもあったとはいえ、紙の透かし模様によってそれらをグループ分けしていたのだから、多数の手稿譜を含む3つの大きなグループの年代的配列順 (発生順) についての判断ミスがなければ、また19世紀的作曲家像による無意識的影響を避けられていたら、現代の年代研究の成果と基本的に同じ筋書きに達することも十分できたはずである。これこそが、(東川 1981) の基本的テーマである。



行本 1976) においてこのような「純粋な」議論の進め方をせず、カンタータ年巻の議論を先に述べてから、その情報を強力な補助手段として年代研究を展開していく<sup>15</sup>。ここにデュルの論法の最大の特徴があり、「レギュラーな」教会カンタータの曲数は圧倒的に多いからこれは議論を説得的に進めるために効果的である。ただし、この論法は論理的には純粋ではなく、そのため読者に誤解を招きやすいことなので、十分な注意が必要である。この件は(江端 2017)で繰り返し説明しているので簡単にまとめよう。

デュルの論文でカンタータ年巻の議論と年代研究の議論がはっきり分かれていない理由は、デュルがバッハの整理した教会カンタータ分類整理法そのものを再現しようとしてはいないためである。デュルはオリジナル手稿譜の伝承状況と C. P. E. バッハの遺産目録の記述からある程度推察できるバッハの遺産相続時の教会カンタータの分類を、透かしの情報で補い、一部は手直しさえして、これらの教会カンタータが作曲された当初の系列(いわば発生学的カンタータ年巻)を推論したのであって<sup>16</sup>、それとバッハ自身の整理・管理・運用法、あるいは遺産相続時のカンタータ年巻の実態とが果たして同一か否か、という問題には触れていない<sup>17</sup>。それは、年代研究が根本主題であるこの論文の主題ではないのである。これらの点に十分な注意を払わなければならない。

デュルが年代研究の情報を一部流用してまで、3つのカンタータ年巻の「発生・成立時」の姿を再構成している理由は、次のように考えるべきである。テーレマンやシュテルツェルのような当時の作曲家は、カンタータ年巻(Kantaten-Jahrgang)をその言葉の文字通りの意味、すなわち「1年という時の流れが過ぎていく間に発生する(作曲される)教会カンタータ集」として、実際に1年で作曲した<sup>18</sup>。デュルは論文執筆以前にすでに、大量の古文書

---

<sup>15</sup> その詳細は(東川 1981: 67ff.)でも見ることができる。

<sup>16</sup> 「レギュラーな」教会カンタータのうち、C. P. E. バッハの遺産目録に載っていない約15曲と、載っているが2系列への分類基準と手稿譜の透かしが矛盾する約8曲について、デュルは透かしの情報を用いて2つの系列への帰属を決めている。これ無しでは2系列が「カンタータ年巻」にならない。

<sup>17</sup> 20世紀初頭に B. F. リヒター(Bernhard Friedrich Richter)が再構成したコラールカンタータ年巻(デュルの言う「年巻 II」)のリスト(Richter 1906)は、年代研究とは独立した探究で得られたものであって、バッハ自身の整理法(および遺産分割時の分類)を再現していることが認められる。これに対し、デュル自身が再構成した「年巻 I」と「年巻 III」のリストは、年代研究用にきわめて役立つ補助材料ではあるが、バッハ自身がこの2つの年巻をどう分類し、遺産相続の際にどう扱われたか、ということを決して再現していない(ことが別に確かめられる)。これについては(Wollny 2001)を参照されたい。

<sup>18</sup> 全体の歌詞として、1人の作者による1年分のカンタータ歌詞集を用いることが多い。また彼らは、そのようなカンタータ年巻を年ごとに次々と作り上げた。

学的データから「ライプツィヒ時代の最初期にバッハが大量の教会カンタータを書いた」という科学的結論を得ているから、それを3つのカンタータ年巻の「成立状況」として記述し、バッハはテーレマンらと「基本的には」同じ方法でカンタータ年巻を作った（発生させた）、という基本線で年代研究の成果を述べている。これは、デュルの論文執筆時には（主張の説得材料になるので）大いに理由のあることだった。

しかしもちろん、最初からデュルは年代研究の詳しい細部を知っており、バッハがテーレマンらと「基本的に」同じとしても、いろいろ異なっている点があることを承知している。まず重要なのは、27年間のライプツィヒ在任中にバッハがカンタータ年巻を最大でも5つしか作らなかったことであり、これは、バッハがライプツィヒ時代の途中からは、カンタータ年巻を新しく作るよりも、既存のものを再演したり追加作曲するなどして「運用」していくことに重点を置くようになった、ということの意味する。そして実際、年代研究によって詳しく見てみると、現存する3つのカンタータ年巻はいずれも、基本的には1年で生じたとしても、1年間で「完成」（生成過程が終了）しているわけではないし、1つのカンタータ年巻を1人の歌詞作者の歌詞集に基づいて作っているわけでもない。現存する3つのカンタータ年巻はどれも、テーレマンやシュテルツェルの「カンタータ年巻」と同じ意味合いで *Kantaten-Jahrgang* と称するには不都合な、「一様でない」性格を持っているのである。これを次に述べよう。

### 3. 再び「ピカンダー年巻仮説」について

バッハの場合、ライプツィヒ時代を「職務年度」（*Amtsjaehr, official year*）で区分して考える必要があり、有効でもある。職務年度は教会暦の三位一体後第1主日から翌年の三位一体祭までの1年間であり、バッハは1723-24年にわたる職務年度の初日から教会カンタータ上演の職務をスタートさせた。この1年間を「第1年度」（バッハの第1職務年度）と呼ぶべきである。

ここで、用語法上の注意が必要である。ゲオルク・フォン・ダーデルセン（*Georg von Dadelsen*）は、職務年度のことを単に *Jahrgang* と呼び、カンタータ年巻は明確に *Kantaten-Jahrgang* として区別する（*Dadelsen* 1958: 119-136, 137-142）。したがって、ダーデルセンの“*Jahrgang I*”は「第1年度」（第1職務年度）の意味である<sup>19</sup>。この用語法は単語の日常的な

---

<sup>19</sup> このことは、ダーデルセンの2つの表（*Dadelsen* 1958: 123ff.）を見ればすぐ分かる。例えば、表Aの *Jahrgang I* のところには「マニフィカト」BWV 243aや「ヨハネ受難曲」BWV 245 が出てお

意味から見て自然であるし、概念の区別も明快である。ところが、デュルはカンタータ年巻を普通は単に *Jahrgang* と省略して呼び、職務年度には特に触れていない。したがって、デュルの “*Jahrgang I*” は「カンタータ年巻 I」を意味し、それを踏まえて「年巻 I」と訳すことになる。この用語法の食い違いは混乱を起こしやすい<sup>20</sup>。デュルの *Jahrgang* はつねに *Kantaten-Jahrgang* の省略語法だ、と考えてかかるべきである。

なお、「ピカンダー年巻」という用語はまた別であって、これはピカンダーの歌詞集 PJ を意味し、「年巻」*Jahrgang* は「歌詞年巻」*Text-Jahrgang* を略して言っている。ところが、「PJ によってバッハが作曲したかもしれないカンタータ年巻」の意味で「バッハのピカンダー年巻」と言う場合は、「年巻」が *Kantaten-Jahrgang* の略として使われている。このようなことは、ドイツ語を母語とする研究者でも曖昧にされている場合がある。本稿で「ピカンダー年巻」という用語を安易に用いないよう工夫しているのは、日本語ではますます曖昧になりがちだからである。

デュルは、現存する 3 つのカンタータ年巻を年代順に年巻 I、年巻 II、年巻 III と呼び、現存しない仮説的なカンタータ年巻 2 つを年巻 IV、年巻 V と呼ぶ。現存する 3 つの年巻について、オリジナル手稿譜の古文書学的調査から判明する基本的なことは次のようである。年巻 I は第 1 職務年度 (1723-24) に生まれ、ヴァイマル時代の旧作の再演を含む<sup>21</sup>。また、年巻 II<sup>22</sup> の根幹部分は第 2 年度 (1724-25) に新作され (受難節までの約 10 ヶ月)、補充作曲が 1735 年 (またはさらに後) まで続いた。年巻 III は第 2 年度の終わり (復活祭から) から第 3 年度 (1725-26) を経て第 4 年度 (1726-27) の受難節前まで、中断を挟みつつ 2 年間かけて生み出された<sup>23</sup>。新作が確認できない主日・祝日の上演曲目はほとんどの場合不明

---

り、「第 1 のカンタータ年巻」の意味ではないことが明白である。

<sup>20</sup> 年代研究の根本的一般論が展開されているダーデルセン (Dadelsen 1958) では、話題がカンタータに特化していないから、「カンタータ年巻」は省略せずに *Kantaten-Jahrgang* と呼び、単に *Jahrgang* とは言わない。一方、デュル (Dürr 1957/1976) は教会声楽曲の年代研究なので当然、教会カンタータが話題の中心であり、「カンタータ年巻」は単に *Jahrgang* と言えば文脈から明らかである。これらの事情で、見かけ上は用語法が大きく違って見える。無用な誤解を避けるためにも、「年巻」と「年度」を注意して訳し分けることが必要である。

<sup>21</sup> 説教後に上演された別の教会カンタータがあれば、それは年巻 III に回された。

<sup>22</sup> 年巻 II は、伝統的に (Richter 1906) 「コラルカンタータ年巻 (*Choralkantaten-Jahrgang*)」と呼ばれてきたものに相当する。コラルカンタータ年巻と「年巻 II」が同じであることは、デュル自身が明言している (Dürr 1957/1976: 12)。

<sup>23</sup> 主に、第 2 年度の復活祭からの時期、第 3 年度のクリスマスからの時期、第 4 年度の三位一体後の時期にまとまって新作され、他の期間は散発的である。

である。また、第4年度の復活祭からは上演の証拠がきわめて乏しくなり、第5年度(1727-28)は9月初めから1月初めまで国喪のため教会カンタータの上演が行われなかった。ピカンダーの歌詞集 PJ-1728 は、第6年度(1728-29)が始まってすぐ刊行されている。

これで分かるように、デュルは、現存しない年巻 IV は「PJ-1728 によるバッハのピカンダー年巻」であって、それが基本的には第6年度に成立した、という可能性を考えたのである。確かに、その時期は上演の証拠がほとんど確認されない「穴場」になっている。また、次のような観察がその根拠となりうる。(1) ピカンダーの歌詞集 PJ-1728 から歌詞を取っている教会カンタータ9曲は、資料伝承の観点から見て、現存する3つの年巻には含まれない。(2) また、その9曲には年代が不確実なものが多いが、第6年度に入ることが確実ないし推測可能なものが確かにあり、明白に別の時期のものはない。(3) 確実に 1728-29 年ごろの成立と分かる他の教会カンタータは見当たらないことと、PJ-1728 の序文にバッハの名前が言及されていることを考え合わせると、この時期に「年巻 IV」が作られたのであれば、それが PJ に基づくものだった可能性が十分考えられるだろう。

前にも述べたように、ヘフナー (Häfner 1975) は、このデュルの仮説を「かなり硬直的な形」で大々的に唱えた。「かなり硬直的」、つまり柔軟性に乏しいというのは、次のような事情を指している。PJ は教会暦1年分のカンタータ歌詞集であるが、ヘフナーはバッハが、PJ のカンタータ歌詞 (のうちで第6年度に教会カンタータが上演されるすべての主日・祝日の歌詞<sup>24</sup>) を、すべて (例外なく) 作曲上演した、と主張した。これは、身動きならない窮屈な仮説であって、そのままの形では最初から無理があると言わざるを得ない。したがって、ヘフナーの考察によって「バッハのピカンダー年巻」の存在が証明されたと考えた研究者はいない、と言って良い。そもそも、期間中に上演された教会カンタータがほとんどすべて判明している第1年度と第2年度にも、「隙間」(上演が確認できない主日・祝日) が散在しているし、年巻 III は2年間かけて、上演がほとんど確認されない数ヶ月を挟みながら生み出されている。これは、バッハが第3年度以降はもはや、1年間を通して継続的に教会カンタータを新作し続けることはなかった、ということを強く示唆しており<sup>25</sup>、そ

<sup>24</sup> 教会カンタータの上演のない主日 (注10参照) と、この1年間の曜日の関係で存在しない主日や祝日に重なる主日を除く。ヘフナーが最初は、これらの主日用の歌詞は PJ-1728 に含まれず、PJ-1732 に収録されるときに補足追加された、と推測していたことは、すでに述べた。

<sup>25</sup> このことは、次のようにきわめて実際に解釈される: 「レパートリーが次第に蓄積してくるので、バッハが第1~2年度のように毎週毎回新作を作り続ける必要と必然性はだんだん減っていくからだ」。これを、「教会音楽への情熱がだんだん冷めてきた」などと解釈するのは、19世紀の芸術家

の後で第 6 年度にもなって、バッハが突然、テーレマンやシュテルツェルのようなやり方で「1 年でカンタータ年巻を作った」ということは極めて考えにくい。また、現存する 3 つのカンタータ年巻に関して、年巻 I と年巻 II の歌詞作者はほぼ不明であり、年巻 III はさまざまな歌詞作者の「以前の」（新作でない）歌詞集から歌詞を取っているので、1 人の歌詞作者の歌詞で作られた現存する年巻はない。さらに、PJ-1728 の個々のカンタータ歌詞は内容的に見て「それほど水準が高いとは言えない」と考えられるので、これらにバッハが 1 年間にわたり完全に「お付き合いした」ことはきわめて疑わしい。

このように、ヘフナーの「ピカンダー年巻仮説」は最初から、「弱い基盤の上に建てられていて脆弱である」という性質を免れなかった。しかし、デュルがあらかじめ観察しておいたことはもっと客観的で、維持できる価値があるので、ヘフナーの硬直的な仮説をもっと柔軟な形に組み替えれば、それを今日検討し直してみる余地も出てくることになる。これは、先にも述べたように、おおよそ次のような形を取る。

「バッハが PJ-1728 の出版時期に、そこから現存する 9 曲以外にもある程度、例えば 10 ないし 20 のカンタータ歌詞を作曲したのではないか。また、その時期は PJ-1728 が直接示す 1 年間の中とは限らず、もう少し後でもかまわないのではないか。」

この場合、もはや「ピカンダー年巻」仮説とは言えなくなるし、言う必要もない。バッハが PJ から作曲したものが、1 つのカンタータ年巻を形成するほどの曲数には達しなかった（のであってもかまわない）、という形の仮説になっているからである<sup>26</sup>。

この形に修正すれば、「ピカンダー年巻問題」という錯綜した問題は、バッハの教会声楽曲で現存していないものの痕跡を探す、という「より広い問題」の一部となる。このことこそが重要である。現存しないがかつて存在したことが証明できる「消失作品」は数多く知られている（例えば「マルコ受難曲」BWV 247）のに対して、PJ に基づく「バッハのピカンダー年巻」という（仮說的）カンタータ年巻がかつて存在したかどうかは不明なので、それを「消失作品」と言うことはできない。そのことがかえって災いして、PJ の歌詞を持つが消失した個別の（仮說的）教会カンタータの痕跡を探す作業は、その困難さもあって最近まであまり積極的に行われてこなかった。しかし、21 世紀に入って、これらの探索と

---

像を 18 世紀前半の職業的音楽家に無意識に投影していることである。

<sup>26</sup> その場合、「年巻 IV」は PJ 以外の歌詞による作品も含んでいたことになる。現存作品中でその候補になり得るものとしては、特に BWV 34 と BWV 146 が考えられる。

のリンクとなり得るような、資料の重大な発見が相次いでいる。シャバリナによる PJ-1728 の現物の発見もその 1 つであるが、この点について次の項で触れよう。

#### 4. 最近の新しい動向と問題意識

2000 年頃からバッハ研究は新しい段階に入り、当時の楽譜資料や文書資料の新発見が相次いでいる。とりわけ、当時の文書資料の大規模な調査発掘が組織的かつ網羅的に行われており、その結果として、バッハを取り巻く当時の状況やバッハのライプツィヒ時代の活動自体が、以前に比べてはるかに具体的に理解できるようになってきた。この流れは 2010 年頃からますます加速しており、それを反映して、「ピカンダー年巻問題」のように不確実な事柄にもいくつかの証拠が新たに発見され、以前とは異なったレベルでの新たな推論が可能になっていることは確かである。以下では、それらを理解するのに必要な基本的事項をいくつか説明しつつ、新しい成果 3 つを簡単に紹介したい。

教会暦の主日・祝日のための「レギュラーな」教会カンタータの年代研究に関して、楽譜資料の古文書学的な直接証拠と並んでもっとも強力な資料は、バッハ当時に教会で配布・販売された歌詞冊子である。それは文字通り “*Texte zur Music*”（「音楽」の歌詞）と題され、場合により 4 回から 7 回分程度の主日・祝日の礼拝に関して、その主要音楽の歌詞台本がまとめて印刷された「小冊子」である。それは担当する特定の業者が印刷を請け負って、1 年に 10 ないし 11 回、定期的に作られた<sup>27</sup>。したがって、バッハの 27 年間のライプツィヒ時代には 300 点ほど作られたことになる。これらは、「レギュラーな」教会カンタータの歌詞作者名や作曲者名を記さないが、上演年月日とその上演場所（どちらの主要教会か）が詳しく記されているので、バッハの現存曲の歌詞との比較によって曲目と上演年月日が確定し<sup>28</sup>、オリジナル手稿譜の古文書学的調査の結果と付き合わせて精密な結論を得ることができる。

ところが残念なことに、約 300 点のうち現存するのはわずか 10 点ほどに過ぎない<sup>29</sup>。そのうち 3 点は古くから、さらに 3 点は 1970 年代から知られていたが、21 世紀になってか

<sup>27</sup> さらに、聖金曜日における大規模受難音楽の歌詞台本冊子が、これらとは別に作られる。

<sup>28</sup> ただし、上演年代が示されるだけであって、初演か再演かはこれだけでは分らない。

<sup>29</sup> 個別機会の礼拝や世俗声楽曲についても同様の冊子が作られるが、それらもほとんど残っていない。



ら T. シャバリナ、およびプファウ (Marc-Roderich Pfau) とヴォルニー (Peter Wollny) によって新たに 4 点が発見され (Schabalina 2008; Pfau 2008; Wollny 2008; Schabalina 2009b)、大きな衝撃を与えた。これらの歌詞本によって、バッハの既知のいくつかの作品の不明だった初演年代が解明され、またオリジナル手稿譜からは分からない再演年代が明るみに出た。またさらに、バッハがシュテルツェルの作品を上演した情報が初めて得られたのである。

特に、シャバリナはサンクト・ペテルブルクで詳しい調査を行なって、「レギュラーな」教会カンタータ以外にもかなりの数の歌詞冊子を発見した<sup>30</sup>。この論考で問題にしているピカンダーのカンタータ歌詞集 PJ-1728 も、まさにその一環として見出されたのである。

筆者にとって、それらの発見の第 1 報となるシャバリナの学会発表<sup>31</sup>の内容を知ったときの驚きは、筆舌に尽くしがたいものがあつた。まさか PJ-1728 の未知の現物が出現するとは思っていなかったという衝撃もさることながら、それ以上に、シャバリナの最初の発見の 1 つ、バッハの第 4 年度 (1726-27) の聖霊降臨大祭と三位一体祭のカンタータ歌詞 4 つを収める冊子には、本当に唖然とした。従来はこの時期の上演曲目はまったく知られていなかったのも、完全に未知の教会カンタータ歌詞が現れたかと思いきや、4 曲すべてがバッハ自身のよく知られた現存作品だったからである<sup>32</sup>。

このことは、次の問題を提起する。1950 年代に飛躍的に発達した年代研究は、オリジナル手稿譜 (スコアとパート譜セット) の成立年を大量に解明して、ライプツィヒ時代初期に大量の教会カンタータが作られたことを明らかにしたし、だからこそデュルは、バッハが「基本的には」テーレマンやシュテルツェルと同様に、教会カンタータを「年巻」として一気に作った、という面を論文で強調した。このことは、デュルの研究の時点では、19 世紀後半以来広まってしまったバッハの教会声楽曲の年代についての誤りを一掃するためにぜひとも必要なことだったのであり、研究がその線に進んだことは確かに必然性があつた。しかし、これらの一連の成果は、作品の「作曲年代・成立年代」を考えているという点では、やはり「作曲家バッハの創作活動」を問題にしているのであつて、教会カンタータを主日・祝日の礼拝で毎回上演し続けるという音楽監督の仕事の本質は、まだ組み尽くさ

---

<sup>30</sup> バッハ以前のものなどもあるが、特に、バッハが上演した受難曲の歌詞 2 点 (1734 年、1744 年) が重要である。

<sup>31</sup> のちに (Shabalina 2009a) として公表されたもの。

<sup>32</sup> BWV 34, 173, 184, 129 の 4 曲。このうち BWV 34, 184 は、別の時期のオリジナル手稿譜しか知られていないし、BWV 173, 129 は該当するオリジナル手稿譜があるが、その従来成立年代判定が 1 年違っていた。

れていなかった。このような総括は、現在の立場において 1950 年代以降の年代研究の成果を眺める場合にぜひとも必要であるだろう。つまり、バッハはテーレマンやシュテルツェルとは「やはり違う方法で」カンタータ年巻を「生み出し、使い続けた」のであって、そこに焦点をあてて、年代研究の新しい段階に進むことが必要である<sup>33</sup>。そしてその観点から、「作曲初演の年代」や「再演年代」ではなく、それを統一した「くりかえされる上演のすべての年代」を扱い、その全体像を再構成しようと試みることである。この場合、資料研究に立脚した年代研究の成果を最大限に使って、「証拠のない上演を確実に推測できるかどうか」ということを探究していくことになり、これは、伝統的な実証主義的研究「の枠を超える一歩」を踏み出すことでもある<sup>34</sup>。

シャバリナの 1727 年聖霊降臨祭の歌詞冊子の発見がもたらした「大きな衝撃」は、正しく評価されなければならない。「現存する既知の作品の、未知の再演が、実は頻繁に行われていたらしい。どのようにしてそれを追求するか？」これは、別次元の問題意識を必要とすることである。確かに、作品を再演する際に追加される補充パート譜や、既存のパート譜への追加書き込みなどの調査によって、これまでも多くの再演の年代が明らかにされていた。しかし、ライプツィヒ時代の初期（1720 年代）にすでに、バッハが自作の再演を活発にかつ体系的に行っていた事実は、その実例がほとんど知られていなかったばかりか、その可能性を考察すること自体がなされていなかった。オリジナル手稿譜にはその再演の痕跡がまったく見出されないので、研究の空白あるいは盲点が生じていたということである。つまり、「作曲からそれほど年数が経たずに再演があれば、上演条件がほとんど変わらないので既存の演奏用パート譜セットがそのまま変更なしに使えてしまい、再演の証拠がオリジナル手稿譜に現れない」というきわめて実際的な事実ほとんど注意を払っていなかった。これは、「バッハは実は、早い時期から自作を盛んに再演していたのではないか」という問題意識<sup>35</sup>が希薄で、その観点から物事をさらに調べてみるのが不十分なまま放

---

<sup>33</sup> この観点を前面に押し出せば、「バッハのカンタータ年巻は 1 年では生み出されていないし、テーレマンやシュテルツェルとは違うので、彼らの作品には適切な *Kantaten-Jahrgang* という言葉を避けて、教会カンタータの集まり・集合体 (collection) と言うべきだろう」という見解に到達する。この件に関して、筆者は Peter Wollny 氏との個人的会話（2010 年）に深く感謝したい。

<sup>34</sup> 実証的証拠がない仮説を取り上げ、そこから議論を展開してみて、何が出てくるかを観察し考察する。この科学的な論理思考そのものに対して「拒否反応」を示す人々がいる、という古めかしい事態は、これからの時代において解消されていくだろう。

<sup>35</sup> 例えば、BWV 83（1724 年、年巻 I）は、オリジナルパート譜セットの中に 1726-27 年の透かし模様をもつパート譜を 1 つ含むので 1727 年の再演が知られているが、従来はこれを、単なる「孤立した事実」として受け取るしかなく、うまく解釈できなかった。今や、これは、この時期に行われた

置されていた、ということであり、「作曲初演年代」の解明の成果が大きすぎたために生じた間隙だった。

とは言え、このシャバリナの発見 1 つだけでは、材料となる上演の例が少なすぎて、そこから推論を進めて具体的な前進を測ることは難しかった。また、シャバリナの PJ-1728 の発見は重要だが、それは教会で配布された “*Texte zur Music*” ではなく、ピカンダー個人が出版した歌詞集である。PJ からの歌詞をもつバッハの教会カンタータの教会配布歌詞冊子そのものは、いまだ見出されていない。

この問題にさらなる突破口が開かれる前に、P. ヴォルニーの新発見が現れた (Wollny 2010)。バッハが筆写した作者不明のミサ曲と共に、目下のピカンダー問題にとって実に重要なものが発見されたのである。若き C. P. E. バッハが 1733 年頃、まだライプツィヒの父親の家にいるときに、PJ 中の歌詞 (Pic 19) <sup>36</sup>によって作曲した未知の教会カンタータである。ヴォルニーはこの衝撃的な事実を、バッハの弟子ドーレス (Johann Friedrich Doles) が PJ 中の歌詞 (Pic 38) によって作曲した教会カンタータ (Melamed 1996) と合わせて考え、バッハは自分では PJ の歌詞でわずかしき作曲しなかったが、息子や弟子たちにそこから歌詞を取って作曲させるために PJ という歌詞集を利用していたのではないか、という推測を行なっている<sup>37</sup>。しかし、筆者がここで重要と考えるのは、バッハは、自分が作曲していなかった歌詞だからこそ、それを息子や弟子に作曲させてみたのではないか、という考察である。これは C. P. E. バッハの新発見カンタータの場合に特に重要となる。BWV 84 と関係するからである。BWV 84 (年巻Ⅲ) の歌詞は PJ 中の Pic 19 を改作したものであるが、すでに 1727 年に作曲されており、PJ-1728 の出版より前である。その改作歌詞自体は PJ 中で出版されていないので、改作がピカンダー自身の手になるものとは考えにくい。つまり、Pic 19 という歌詞はすでに 1727 年に存在しており、その時点で誰かが改作してバッハが BWV 84 の歌詞に使ったが、ピカンダーは Pic 19 を保持していてそれを PJ-1728 で出版し、それを後から C. P. E. バッハが使ったことになる。

---

再演のうちで例外的に古文書学的証拠が残されている例であり、同時期にはさらに、年巻Ⅰの教会カンタータの「痕跡を残さない再演」がいくつもあったのだろう、ということを示唆する興味深い例となったわけである。

<sup>36</sup> ピカンダーのカンタータ歌詞の記号 (「付録」を参照)。

<sup>37</sup> ヴォルニーはまた、バッハの PJ カンタータ BWV Anh. 190 と BWV 145 が、もしかすると若き C. P. E. Bach の作品なのではないか、という興味深い問題を提示している。筆者は、この説が正しいとは考えていないが、十分追求する価値のある問題提起であることは間違いない。

ここでいよいよ、C. ブランケン (Christine Blanken) の大発見が登場する (Blanken 2015b)。  
これは、ニュルンベルク出身の神学者で一時期はライプツィヒのバッハのところで活動していた C. ビルクマン (Christoph Birkmann) が編集し、ニュルンベルクで 1728 年に出版した 1 年分のカンタータ歌詞集であって、その中にはバッハの教会カンタータの歌詞が大量に含まれており、さらに、「ヨハネ受難曲」BWV 245 第 2 稿の歌詞台本全体も含まれていた。1728 年はこれらのバッハ作品の初演より後なので、ビルクマンはライプツィヒでバッハからこれらの教会声楽曲の歌詞を知ったことになる。つまり、紛れもない同時代資料であり、しかもバッハ自身から直接出ているものであって、その資料的価値は実に高い。この歌詞集は単にバッハの教会カンタータの歌詞を多数含むばかりではなく、そのうちの 8 曲<sup>38</sup>の歌詞は、確実にビルクマン自身の作であると考えられる。他にも多数のバッハの教会カンタータの歌詞を含み、中には、ヴァイマル時代の作品のライプツィヒでの未知の再演を証明するものもある。また、バッハが用いたことが分かっている以前の詩人の詩集からの歌詞も含まれているので、それらをバッハが作曲した可能性が示唆される。このような重要な材料が大量に含まれている同時代出版物は、まさしく初めて発見された。

ビルクマンは 1724 年末から 1727 年 9 月初めまでライプツィヒに滞在していた。彼は数学者から転じた経歴をもつ、高度に専門的な神学者であって、ピカンダーに助言をしていたと思われる。以前から、BWV 19 (1726 年) の歌詞はピカンダーの原作に基づくことが知られていたが、これがビルクマンの歌詞集に含まれるので、ピカンダーの歌詞をビルクマンが手直ししたと考えられる。そして、ブランケンがビルクマン作の歌詞の特徴を解析して、BWV 84 (1727 年) の歌詞もビルクマンがピカンダーの Pic 19 から改作したものだろうと判断している<sup>39</sup>。

そして、大きな問題は、このビルクマンのカンタータ歌詞集に、PJ の中に含まれるピカンダーの歌詞 2 つ (Pic 31, Pic 32) が含まれていることである。これは、PJ-1728 の出版以前、おそらく 1727 年に、すでにバッハによって作曲されていた可能性があるということである。つまり、PJ は 1728 年に作られたのではなく、すでに 1727 年初めから少しずつ書かれ、その中のあるものがバッハによって作曲されつつ、PJ-1728 の出版まで進んだ、という可能性が十分考えられる。これは、「レギュラーな」教会カンタータの上演カレンダーの再

---

<sup>38</sup> BWV 169, 56, 49, 98, 55, 52 の 6 曲セット (1726 年)、および BWV 58, 82 の 2 曲 (1727 年)。

<sup>39</sup> 「マタイ受難曲」BWV 244 の歌詞の材料となるミュラー (H. Müller) の説教集をピカンダーに教えたのもビルクマンだった可能性が考えられる。

構成に関する重要な資料を提供するものである。

筆者がビルクマンについて最初に知ったのは (Blanken 2015a) によってであり、その重要性には驚愕した。ここには、ここまで再三述べてきた問題意識、つまりバッハの教会カンタータの「再演」を考えて、「レギュラーな」教会カンタータの上演表を再構成していくための鍵、あるいは考え方の基本となるべきものが、多数含まれていると言える。ここから得られることを、さらに最近の新しい文書資料の発見と付き合わせて調べていくことが求められている<sup>40</sup>。

このように、1950年代に生み出された現代の「作曲家バッハ」の「レギュラーな」教会カンタータの「作曲初演年代」の研究は、21世紀に入って明らかに新しい局面を迎えている。それは作曲家バッハから音楽監督バッハへの視点の移行であり、新作の創造と初演の年代の探究から、日々の活動としての「レギュラーな」教会カンタータの継続的上演の年代の探究へと、問題意識を深めることである。さまざまな痕跡を十分に調べ、証拠のない再演を体系的に推測できるかという可能性を探っていくこと。これが、新しく最もホットな話題の1つとして、目の前にやってきている。

これが十分に考えられるようになってこそ、ライプツィヒ市音楽監督バッハの「レギュラーな」活動である主日・祝日用の教会カンタータの継続的上演を、全体として把握し理解できる可能性が、さらに豊かに広がるものと思われる。つまりは、若き日のバッハが書き記した「整備された教会音楽(隊) *regulirte Kirchen-Music*」についての、さらに新たな視点をもたらされることになるだろう。

最初の予定では、バッハの4声コラール集の研究について触れて、ヘフナーがすでに行なった調査をさらに深く調べていくための粗筋を書くつもりであった。残念ながら、今回はそれを断念し、次の機会につなげていくこととしたい。なぜなら、消失作品や、存在したかどうかともわからない作品を探索するもっとも肝心な材料は、「ゴミの山」と言われてしまいそうな「4声コラール集のさまざまな手稿譜資料」の中に埋もれているからである。故・小林義武氏がかつて筆者に、「ゴミの山は宝の山に変えてください」という励ましの言葉を寄せられたことが思い起こされる。

---

<sup>40</sup> この新発見のカンタータ歌詞集に関するさまざまな情報と意見交換、また2016年にライプツィヒでその写真を見せていただいたことに対し、筆者は Christine Blanken 氏に深い感謝の意を表す。

本稿の内容は、ベルファストの富田庸氏（TOMITA Yo）との長期間にわたる討論によって成長してきたもの（成長しつつある研究の一端）であり、それがなければ生まれ得なかった。また、書き上げることができたのはひとえに、2014年の最初の執筆申請以来2回の挫折にもかかわらず原稿の完成を待ち続けてくださった紀要委員会の尽力とお励ましによるものであり、これらすべての方々に深く感謝いたします。



## 参考文献

- BJ *Bach-Jahrbuch. Im Auftrage der Neuen Bachgesellschaft* (1909- ). Leipzig: Evengelische Verlagsanstalt (1992- ). ISSN 0084-7682. (巻号は通巻号数ではなく西暦で示す)
- Blanken, Christine. 2015a. "A Cantata-Text Cycle of 1728 from Nuremberg: a Preliminary Report on a Discovery relating to J. S. Bach's so-called 'Third Annual Cycle'." *Understanding Bach* 10, 9-30.
- . 2015b. "Christoph Birkmanns Kantatenzyklus „Gott-geheiligte Sabbaths-Zehnden“ von 1728 und die Leipziger Kirchenmusik unter J. S. Bach in den Jahren 1724-1727." *BJ* 2015, 13-74.
- Dadelsen, Georg von. 1958. *Beiträge zur Chronologie der Werke Johann Sebastian Bachs*. (Tübinger Bach-Studien, 4/5), Trossingen: Hohner Verlag.
- Dürr, Alfred. 1957. "Zur Chronologie der Leipziger Vokalwerke J. S. Bachs." *BJ* 1957, 5-162.
- . 1958. "Ich bin ein Pilgrim auf der Welt. Eine verschollene Kantate J. S. Bachs." *Die Musikforschung*, 11/4, 422-427.
- . 1961. "Wieviele Kantatenjahrgänge hat Bach komponiert? Eine Entgegnung." *Die Musikforschung*, 14/2, 192-195.
- . 1976. *Zur Chronologie der Leipziger Vokalwerke J. S. Bachs. Zweite Auflage. Mit Anmerkungen und Nachträgen versehener Nachdruck aus Bach-Jahrbuch 1957* (Musikwissenschaftliche Arbeiten, 26). Kassel [u.a.]: Bärenreiter.
- Häfner, Klaus. 1975. "Der Picander-Jahrgang." *BJ* 1975, 70-113.
- . 1982. "Picander, der Textdichter von Bachs viertem Kantatenjahrgang. Ein neuer Hinweis". *Die Musikforschung*, 35/2, 156-162.
- . 1987. *Aspekte des Parodieverfahrens bei Johann Sebastian Bach: Beiträge zur Wiederentdeckung verschollener Vokalwerke*. (Neue Heidelberger Studien zur Musikwissenschaft, 12). Laaber: Laaber-Verlag.
- Hofmann, Klaus. 2002. "Anmerkungen zum Problem „Picander-Jahrgang“." In *Bach in Leipzig - Bach und Leipzig. Bericht über die Internationale Wissenschaftliche Konferenz Leipzig, 27. bis 29. Januar 2000*, hrsg. von Ulrich Leisinger. (Leipziger Beiträge zur Bach-Forschung, 5), 69-87. Hildesheim: Georg Olms Verlag.

- Kobayashi, Yoshitake. 1988. "Zur Chronologie der Spätwerke Johann Sebastian Bachs. Kompositions- und Aufführungstätigkeit von 1736 bis 1750." *BJ* 1988, 7-72.
- . 1989. *Die Notenschrift Johann Sebastian Bachs. Dokumentation ihrer Entwicklung*. Kassel [u.a.]: Bärenreiter, Leipzig: Deutscher Verlag für Musik. [= NBA IX/2]
- . 1992. "Zur Teilung des Bachschen Erbes." In *Acht kleine Präludien und Studien über BACH. Georg von Dadelsen zum 70. Geburtstag am 17. November 1988. Hrsg. vom Kollegium des Johann-Sebastian-Bach-Instituts Göttingen*, 67-75. Wiesbaden [u.a.]: Breitkopf & Härtel.
- Kobayashi, Yoshitake; Beißwenger, Kirsten. 2007. *Die Kopisten Johann Sebastian Bachs. Katalog und Dokumentation*. 2 vols (Textband und Abbildungsband). Kassel [u.a.]: Bärenreiter. [= NBA IX/3]
- Melamed, Daniel R. 1996. "J. F. Doles's Setting of a Picander Libretto and J. S. Bach's Teaching of Vocal Composition." *The Journal of Musicology*, 14/4, 453-474.
- Pfau, Marc-Roderich. 2008. "Ein unbekanntes Leipziger Kantatentextheft aus dem Jahr 1735 - Neues zum Thema Bach und Stölzel." *BJ* 2008, 99-122.
- Picander. 1728. *Cantaten auf die Sonn- und Fest-Tage durch das gantze Jahr, verfertigt durch Picandern*. Leipzig, 1728. 168p.
- . 1732. *Picanders Ernst-Schertzhaffte und Satyrische Gedichte. Dritter Theil*. Leipzig, 1732. 567p.
- Richter, Bernhard Friedrich. 1906. "Über die Schicksale der der Thomasschule zu Leipzig angehörenden Kantaten Joh. Seb. Bachs." *BJ* 1906, 43-73.
- Schabalina, Tatjana. 2008. "„Texte zur Music“ in Sankt Petersburg. Neue Quellen zur Leipziger Musikgeschichte sowie zur Kompositions- und Aufführungstätigkeit Johann Sebastian Bachs." *BJ* 2008, 33-98.
- Shabalina, Tatiana. 2009a. "Recent Discoveries in St Petersburg and their Meaning for the Understanding of Bach's Cantatas." *Understanding Bach* 4, 77-99.
- Schabalina, Tatjana. 2009b. "„Texte zur Music“ in Sankt Petersburg – Weitere Funde." *BJ* 2009, 11-48.
- Scheide, William H. 1961a. "Ist Mizlers Bericht über Bachs Kantaten korrekt?" *Die Musikforschung*, 14/1, 60-63.

- . 1961b. “Nochmals Mizlers Kantatenbericht - Ein Erwiderung.” *Die Musikforschung*, 14/4, 423-427.
- . 1980. “Bach und der Picander-Jahrgang - Eine Erwiderung.” *BJ* 1980, 47-51.
- . 1983. “Eindeutigkeit und Mehrdeutigkeit in Picanders Kantatenjahrgangs-Vorbemerkung und im Werkverzeichnis des Nekrologs auf Johann Sebastian Bach.” *BJ* 1983, 109-113.
- Schulze, Hans-Joachim. 1990. (book review of “Häfner 1987”). *BJ* 1990, 92-94.
- Weiß, Wisso. 1985. *Katalog der Wasserzeichen in Bachs Originalhandschriften*, von Wisso Weiss, unter musikwissenschaftlicher Mitarbeit von Yoshitake Kobayashi. 2 vols. Kassel [u.a.]: Bärenreiter, Leipzig: Deutscher Verlag für Musik. [= NBA IX/1]
- Wollny, Peter. 2001. “Johann Christoph Friedrich Bach und die Teilung des väterlichen Erbes.” *BJ* 2001, 55-70.
- . 2008. “„Bekennen will ich seinen Namen“ - Authentizität, Bestimmung und Kontext der Arie BWV 200. Anmerkungen zu Johann Sebastian Bachs Rezeption von Werken Gottfried Heinrich Stölzels.” *BJ* 2008, 123-158.
- . 2010. “Zwei Bach-Funde in Mügeln. C. P. E. Bach, Picander und die Leipziger Kirchenmusik in 1730er Jahren.” *BJ* 2010, 111-151.
- 江端伸昭 2017 「J. S. バッハの『シェープラー・コラール集』について」『フェリス学院大学音楽学部紀要』第 17 号 17-40。
- 東川清一 1981 『バッハ研究ノート：作曲年代をめぐって』音楽之友社。

---

*I am grateful to Tatiana Shabalina (Saint Petersburg State Conservatory), Peter Wollny (Bach-Archiv Leipzig), Christine Blanken (Bach-Archiv Leipzig) and Yo Tomita (Queen's University, Belfast) for their invaluable comments and suggestions in private communication since 2010.*

【付録】 ピカンダーのカンタータ歌詞集 PJ に含まれる 70 の歌詞一覧

左から各欄に、歌詞番号 Pic (Häfner 1975 による)、教会暦指定日、タイトルとその邦訳、バッハの現存作品、楽章構成を示す。配列は PJ-1732 (教会暦順) に従う (PJ-1728 は Pic 46 から始まる)。\*はライブツィヒでは教会カンタータの上演がない主日。タイトルの斜体は聖句、ボールド体はコラル歌詞を示す。

●教会暦欄の略語：

[1] 三大祝日：降誕大祭第 x 祝日(x W)、復活大祭第 x 祝日(x O)、聖霊降臨大祭第 x 祝日(x Pf)。

[2] その他の祝日と主日：待降節第 x 主日(x Adv)、降誕後の主日(S n W)、新年(NJ)、新年後の主日(S n NJ)、顕現祭(Ep)、顕現後第 x 主日(x p Ep)、七旬節・六旬節・五旬節(Septuag, Sexag, Estom)、受難節の 6 つの主日(Invoc, Remin, Oculi, Laet, Jud, Palm)、復活後の 6 つの主日(Quasim, Miseric, Jubil, Cant, Rog, Exaudi)、昇天祭(HF)、三位一体祭(Tr)、三位一体後第 x 主日(x p Tr)。

[3] 日付固定祝日：聖母マリアの浄めの祝日(MR)、聖母マリアのお告げの祝日(MV)、聖母マリアの訪問の祝日(MH)、洗礼者ヨハネの祝日(Joh)、大天使ミカエルの祝日(Mich)。

●楽章構成欄の略語：A: Aria, A2: Duetto, Ao: Arioso, R: Recitativo, D: Dictum(聖句), Ch: Choral。最も普通な ARARCh 型は単に「○」と記す。複数の曲種の同時進行は「A+Ch」のように記す。

★歌詞タイトルの邦訳は、藤原一弘氏による (2014 年 11 月)。

	教会暦	タイトル (歌詞台本冒頭句)	BWV	楽章構成と備考
Pic 1	1 Adv	<i>Machet die Thore weit, und die Thüre in der Welt hoch</i> 門を開き、この世の扉を高く挙げよ		詩編 24,7 DARARACH
Pic 2	2 Adv*	Erwache doch mein Hertze 目覚めよ、わが心よ		ARARARCh
Pic 3	3 Adv*	Alle Plagen, alle Pein, zu ertragen あらゆる労苦とあらゆる苦悩を堪え忍ぶは		○
Pic 4	4 Adv*	Vergiß es, doch, mein Hertze, nicht そを ゆめ忘るる事なかれ、わが心よ		○
Pic 5	1 W	<i>Ehre sey GOTT in der Höhe</i> 高きところにいます神に栄光あれ	BWV197a	ルカ 2,14 DARARACH
Pic 6	2 W	Kehret wieder, kommt zurücke 帰り来たり、立ち戻れ		○
Pic 7	3 W	Ich bin in dich entzündt 我はあなたを慕う熱き想いに燃え立ち		○
Pic 8	S n W	Niemand kan die Lieb ergründen 何人(なんびと)と言えど 主の愛を究め尽くし得ず		○
Pic 9	NJ	<i>GOtt, wie dein Nahme, so ist auch dein Ruhm</i> 神よ、あなたの御名のごとく、あなたの誉れも	BWV 171	詩編 48,11 DARARCh
Pic 10	S n NJ	Steh auf mein Hertz 立ち上がれ わが心よ		RARARCh

Pic 11	Ep	<i>Dieses ist der Tag, den der HErr macht</i> この日こそ、主が造り給いし日		詩編 118, 24-25 DRARARCh
Pic 12	1 p Ep	Ich bin betrübt 我は悲しみに沈み		RAR,A2,Ch
Pic 13	2 p Ep	Ich hab in mir ein frölich Hertze わが心は喜びに満ち		○
Pic 14	3 p Ep	Ich steh mit einem Fuß im Grabe わが片足はすでに墓穴の中にあり	BWV 156	A+Ch,RARCh
Pic 15	4 p Ep	Wie bist du doch in mir 何故かくも悲しむや		RARARCh
Pic 16	MR	<i>HErr, nun lässest du deinen Diener in Friede fahren</i> 主よ、いまやあなたは あなたの僕を安らかに去らせ給う		ルカ 2,29 DARARCh
Pic 17	5 p Ep	Erwache, du verschlaffnes Hertze 目覚めよ、汝 眠り呆けし心よ		○
Pic 18	6 p Ep	<b>Valet will ich dir geben</b> 我は喜びて汝と袂を分かつ		Ch+R,ARARCh
Pic 19	Septuag	Ich bin vergnügt mit meinem Stande 我はわが身の上に満ち足れり		○ BWV 84 と関連
Pic 20	Sexag	Sey getreu biß in den Tod 死に至るまで忠実たれ		○
Pic 21	Estom	Sehet! wir gehen hinauf gen Jerusalem 見よ、我らはエルサレムへと上り行く	BWV 159	Ao+R,ARARCh
Pic 22	Invoc*	Weg mein Hertz mit den Gedancken 心を奮い立たせよ		○
Pic 23	Remin*	Ich stürme den Himmel mit meinem Gebethe 我はわが祈りによりて天の御国をつかみ取らん		○
Pic 24	Oculi*	Schliesse dich, mein Hertze, zu 錠を下ろして閉じよ、わが心よ		○
Pic 25	Laet*	Wer nur den lieben GOtt läst walten 尊い神の御心にのみ委ねる者は		○
Pic 26	Jud*	Boese Welt, schmääh immerhin 誇るがよい、悪しき世よ		○
Pic 27	MV	<i>Der HErr ist mit mir; darum fürchte ich mich nicht</i> 主はわが味方、されば我は恐ることなし		詩編 118,6 DARARCh
--	Palm*	[Auf den Palmen=Sonntag / siehe den ersten Advent]		固有の歌詞なし 「1 Adv を見よ」
Pic 28	1 O	Es hat überwunden 勝利を収め給えり		ARARARCh
Pic 29	2 O	Ich bin ein Pilgrim auf der Welt 我はこの世を旅する巡礼なり	BWV Anh. 190	RARARCh
Pic 30	3 O	Ich lebe, mein Hertze, zu deinem Ergötzen 我の生くるは、わが心よ、汝を楽しみますため	BWV 145	A2,RARCh

Pic 31	Quasim	Welt, behalte du das deine 世よ、汝が所有(もの)に執着し続けよ		○
Pic 32	Miseric	Ich kan mich besser nicht versorgen 我にはこれに優る心配りは適わず		○
Pic 33	Jubil	Faße dich betrübter Sinn 心を静めよ 悲しみに沈む思いよ		ARARACH
Pic 34	Cant	Ja! ja! ich bin nun gantz verlassen しかり！しかり！いまや我はまことに見捨てられたり		AoRAAoARACH
Pic 35	Rog	Ich schreye laut mit meiner Stimme 我は声をあげ大声で叫ばん		ARAOARCh
Pic 36	HF	Alles, alles Himmel=werts すべて、すべてのものは天の御国を目指し		ARARARCh
Pic 37	Exaudi	Qväle dich nur nicht, mein Hertz ゆめ苦しむことなかれ、わが心よ		ARAOARCh
Pic 38	1 Pf	Raset und brauset ihr hefftigen Winde 荒れ狂い 鳴りどよめ 激しき風よ		AChRARACH
Pic 39	2 Pf	Ich liebe den Höchsten von gantzen Gemüthe 我は心の限りに いと高き神を愛さん	BWV 174	ARACH
Pic 40	3 Pf	Ich kloppf an deine Gnaden=Thüre 我はあなたの慈しみの戸を叩かん		ARARAOCh
Pic 41	Tr	GOtt will mich in den Himmel haben 神は我を天の御国へと受け入れんと欲し給い		○
Pic 42	1 p Tr	Welt, dein Purpur stinckt mich an 世よ、汝のまとう紫の衣は我には疎ましきもの		AAoRARAOCh
Pic 43	2 p Tr	Kommt, eilet, ihr Gäste, zum seeligen Mahle 急ぎ来たれ、客人(まろうど)よ、いとも幸いなる宴へ		○
Pic 44	3 p Tr	Wohin? mein Hertz いずこへ？わが心よ		RA,R+Ch,ARCh
Pic 45	4 p Tr	Laß sie spotten, laß sie lachen 唾を吐きあざ笑うに任せよ		○
Pic 46	Joh	<i>Gelobet sey der HERR, der GOtt Israel</i> 賛美あれ、イスラエルの神なる主に		ルカ 1,68-69 DARARCh
Pic 47	5 p Tr	<b>In allen meinen Thaten</b> わがなす すべての営みにおいて		Ch+R,ARACH
Pic 48	MH	<i>Meine Seele erhebt den HErrn</i> わが魂は主をあがめ		ルカ 1,47 DARARCh
Pic 49	6 p Tr	GOtt, gieb mir ein versöhnlich Hertze 神よ、我に和解する心を与え給え		○
Pic 50	7 p Tr	Ach GOTT! ich bin von dir ああ 神よ！我はあなたより		R+AO,ARACH
Pic 51	8 p Tr	HErr, stärke meinen schwachen Glauben 主よ、わが薄き信仰を強め給え		○



Pic 52	9 p Tr	Mein JEsu, was meine わがイエスよ、わがものは		○
Pic 53	10 p Tr	Laßt meine Thränen euch bewegen もし わが涙が汝らの心を打たば		○
Pic 54	11 p Tr	Ich scheue mich 我は畏れ憚らざるを得ず		○
Pic 55	12 p Tr	Ich bin wie einer, der nicht höret 我もまた 聞くことなき者の一人なり		○
Pic 56	13 p Tr	Können meine nasse Wangen もし涙に濡れしわが頬と		ARARAOCh
Pic 57	14 p Tr	Schöpffer aller Dinge 万物の創造主(つくりぬし)よ		○
Pic 58	15 p Tr	Arm und dennoch frölich seyn 貧しくとも喜びに満たされること		○
Pic 59	16 p Tr	Schließet euch, ihr müden Augen 閉じよ、疲れ果てし眼(まなこ)よ		○
Pic 60	17 p Tr	Stoltz und Pracht 見せかけのみの自尊心(プライド)は		○
Pic 61	18 p Tr	Ich liebe GOtt vor allen Dingen 我はあらゆるものにまさりて神をば愛す		○
Pic 62	Mich	Man singet mit Freuden vom Sieg 勝利と歓呼の歌が響く	BWV 149	詩編 118, 15-16 DARARACH
Pic 63	19 p Tr	GOtt, du Richter der Gedancken 心の中(うち)なる考えを審き給う神よ		○
Pic 64	20 p Tr	Ach[,] ruffe mich bald ああ、急ぎて我を呼び給え		○
Pic 65	21 p Tr	Ich habe meine Zuversicht 我は堅き信頼を	BWV 188	○
Pic 66	22 p Tr	Gedult, mein GOtt, Gedult! 忍耐を、わが神よ、忍耐を！		○
Pic 67	23 p Tr	Schnöde Schönheit dieser Welt この世の貧相なる美しさよ		○
Pic 68	24 p Tr	Küsse, mein Hertze, mit Freuden die Ruthe わが心よ、喜びもて「懲らしめの」笞に口づけせよ		○
Pic 69	25 p Tr	Eile, rette deine Seele 急ぎ来たりて、汝が魂を救え		○
Pic 70	26 p Tr	Kömmst denn nicht mein JEsus bald? わがイエスはすぐには来給わずや？		○